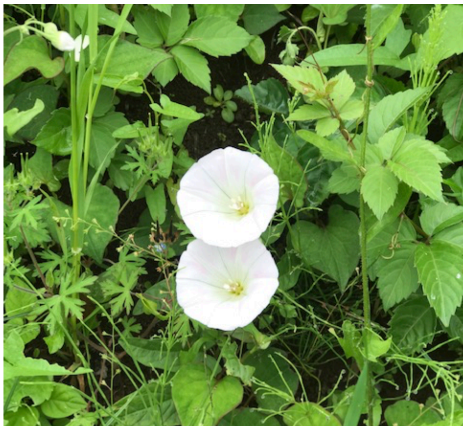
ベストピア Bestopia
第411号
2021年5月号
パリ通信
第113号

松山幸生先生の召天

5月2日聖日礼拝中に先生は召された。私たちは礼拝後に知った。91歳であられた。
私にとっては最後の年長の牧者で、私を呼び覚まし「悔改め」を優しい眼差しで強く語ってくださった。私が先生と親しく交わることができたのは短い年月でしたが、その賜った影響は50年にもまさるものです

1930年生まれの松山先生は11歳から15歳を戦時下で過ごされています。戦地に赴く直前の年齢で、銃後を背負わされた年代です。1945年には16歳の少年も特攻に送り込まれています。小田原市の小学校6年生の女児も本土決戦に備えて特殊地下壕（弾薬や武器を保管する）に駆り出されています。先生も「一歩の距離」で特攻になりえたかも知れなかった、その心境に苦悩されておられました。
松山先生は「学校で勉強を教わることはなかった。爆弾運びに駆り出された」「敗戦は絶望と貧困の極みで価値観の大転換迫られ、多感な青年は生る道を見いだすことが困難であった」と述懐されています。松山先生の平和思想はこの痛ましい体験から生まれたと私は推察しています。観念的でなく、体験的であるが故に大いなるものに動かされて行動されてこられたと思います。（先生の苦悩は城山三郎さんに通じるものがあります）
（「一歩の距離」城山三郎著・「指揮官たちの特攻」詳細はベストピア第270号、第271号に紹介しました）

1947年12月日本基督教団阿佐ヶ谷教会、大村勇牧師より洗礼を受けられ、東京学芸大学を卒業、1953年から1956年教職に就きながら日本聖書神学校に通学され、1963年牧師となられて平和の福音を説かれ始めた。1969年から32年間ご自宅の庭に仮小屋を建てられ礼拝堂として伝道活動をなされた。平和憲法を守る会の信仰的指導者として第一線に立たれ活躍され、その最後の頃に、私も参加させて頂き、ご一緒に憲法の条文を輪読しました。
先生は実践家であられ、憲法改正反対の姿勢を明らかにされ、国会の前で一人祈りを捧げられました。デモ排除隊もこの先生の姿勢には困惑したであろうと想像しますが、私は徹底した非暴力無抵抗のガンジーを思い起こしました。
私の手元に2016年7月の松山先生の礼拝説教のテープ記録があります。その中で知り得たことは国会に超党派のキリスト者の会があり、そこで153回の奨励閑話をされたとあります。これがいつまで続けられたか不知ですが、この回数から12年以上前、即ち2003年頃から続けられていたこと



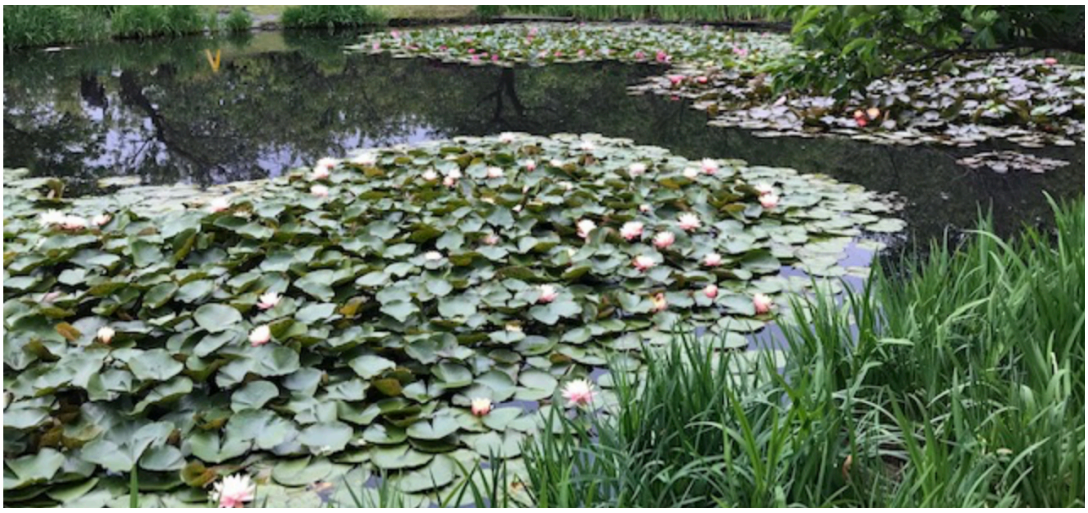
になります。
戦後、東大総長を歴任された矢内原忠雄先生が戦前に柿の木坂で反戦説教をされ追放された事件がありましたが、近年では、政治家に直接奨励をされる牧者を私は他に聞き及びません。

先生の伝道活動は幅広く、又信仰の継承に力を注がれ、1958年から東京学芸大学卒業生と共に聖書研究活動を始められ40年を超えて「旧約聖書を学ぶ会」を指導され、その足跡が教え子さん達の偉大なる神の業とも言える尽力で「申命記」と「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の説教集が出版されています。（後述再掲）

小田急相模原駅前の公共施設の一部屋を自ら予約され、万人に開かれた聖書研究会「エクレシア・シャローム」をもたれ教派教会を越え和やかな学びの場を公にされました。私はその最後の数回に参加させて頂き、聖書輪読と祈り、力強い励ましと賛美の至福の時に参加させて頂きました。最終会は名残惜しくありましたが、この頃から先生の体調に変化が始まったと思います。
私には一つの後悔があります。それはこの会場造りに気が付かず、先生ご夫妻に任せきってしまっていたことです。時に先生は85歳を過ぎておられたのです。最後の2回だけ会場造りをお手伝いさせて頂いて、こんな重い机を10台も運んでおられたのかとすまなさと悔しさで涙が出たことを覚えています。

そして、この集会を通して奥様がどんなに先生を支えられたか、その深さと重さをいたく感じずにはおられませんでした。場を清め、我々を迎え、祝福してみ言葉を説き明かしてくださり、親しく交わるお茶を用意してくださったのです。、参加者の惜別は深くありましたが、この会は先生のご健康に配慮して閉じられました。私は特別に恵まれて引き続いて相模原南教会で先生の説教を聞くことができました。

私にとって、先生の説教は貧しい私の魂に豊かな聖霊を賜る特別の響きをもっていました。説教の内容は「悔改め」が中心で、「あなたは自分の都合のよい神をつくっていないか」と激しく迫ってきます。そのお声には独特の響きがあり、豊かな慈しみと愛に溢れて

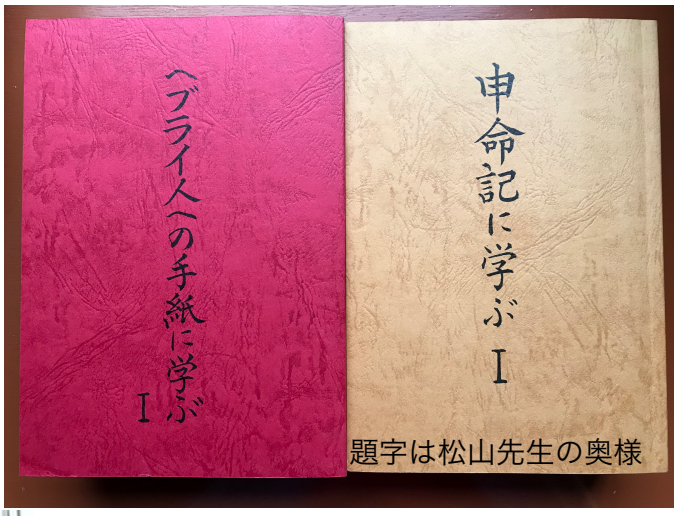


今、この時も残響を聴くことができます。礼拝は厳粛の中に優しさが溢れ、み言葉がそれぞれの胸に深く染みこんでいきま

した。
先生は美声で、いつも元気よく讃美歌を歌ってくれました。音痴の私も安心して歌うことができ、聖なる響が礼拝堂をみたしました。
月一度の礼拝説教をされた愛餐会の前には一人ひとりの机の上に黙として祈りつつ「栞」と『平和の集いの案内」をおかれた。聖句の入った栞は1枚ではなく一束7枚の時もあり又、その回数の多さに頭をさげたことはしばしばです。今も多くの方が先生からの栞を聖書に讃美歌に挟んでおられます。その時には感じなかった先生の慈しみの深さを、今、思い起こし共に礼拝に預かった日々の大きな恵みを味わっております。

松山幸生先生の遺作

先に記しましたように1958年から40年以上続いた「旧約聖書を学ぶ会」では、旧約聖書が終わり新約聖書に入っています。
その中から先ず「申命記」（1983年7月から99回）の「解き明かし」が先生の語り通りに文字に起こされ著作となっています。1992年3月から6月にかけて4分冊となっています。聖書と同じように2段組になっており、総頁数は1027です。旧約聖書は39巻で総頁数1478で申命記は61頁です。

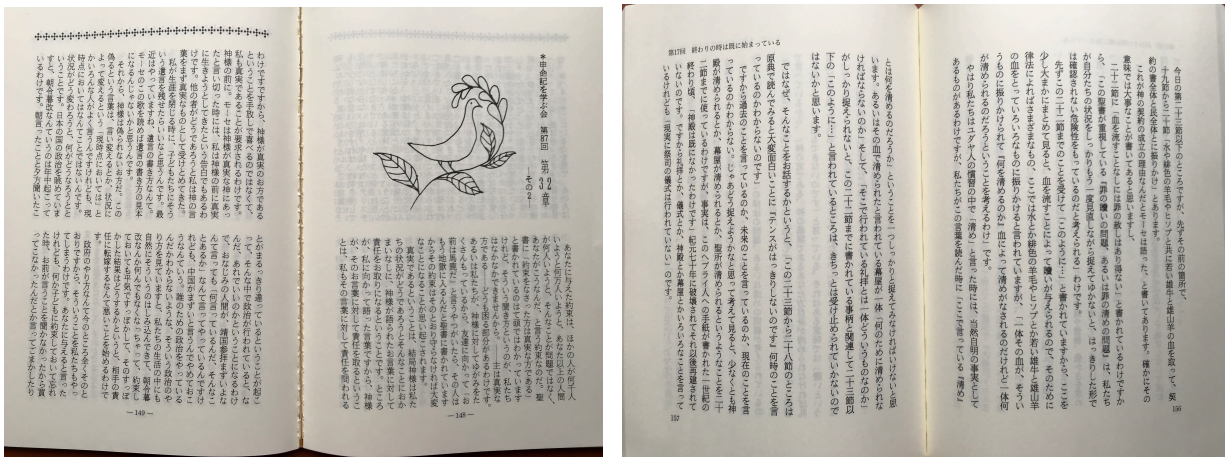


題字は松山先生の奥様

次に「ヘブライ人への手紙に学ぶ」（1996年から33回）の「解き明かし」が2001年1月に3分冊で一度に著作になっています。総頁数は1000頁です。新約聖書26巻の総頁数は467頁で「ヘブライ人への手紙」は18頁です。
松山先生の丁寧な語りが伝わります。そしてお弟子さん達のご尽力には感動し敬意を表し感謝いたします。

私は「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を今月の12日、「申命記」20日に入手することができました。いずれも最後の一冊であったようで、その後ネットでも見つける事が出来ません。もっと早くとの後悔は否めませんが、この道を指し示してくださった神に感謝します
この二冊を座右に置きながら、「今から」松山幸生先生を通して聖書を学び、我が貧しい心に神のみ声を聴くことができるように歩みます。

先生とのお別れは人間として寂しいです。偉業の数々を遺されて御心によって召天されました。その足跡をできる限り多く踏みしめさせて頂きます。先生、有難うございます。



左は「申命記」の口述記録、1027頁、右は「ヘブライ人への手紙に学ぶ」1000頁

先生の召天を知りました夜、聖書を開きました。何の意図もなく開かれたところがエフェソの信徒への手紙第6章10節でした
聖書を紐解くことは出来ません故、二つの聖書を併記して味わい松山幸生を偲びました。

上段は聖書協会共同訳(2018)・
下段は新共同訳（1987)から引用しました。

エフェソの信徒への手紙６章⑩〜⑳

最後に、主にあって、その大いなる力によって強くありなさい。
最後に言う、主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。⑩

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるように、神の武具を身につけなさい。
悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身につけなさい。⑪

私たちの戦いは、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものだからです。
わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。⑫

それゆえ、悪しき日にあってよく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を取りなさい。
だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身につけなさい。⑬

つまり、立って、真理の帯を締め、正義の胸当てを着け、平和の福音を告げる備えを履物としなさい。
立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。⑭

これらすべてと共に信仰の盾を手に取りなさい。
なお、その上に、信仰を盾として取りなさい。⑮

それによって、悪しき者の放つ燃える矢をすべて消すことができます。
それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。⑯

また救いの兜をかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。
また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。⑰

どのような時にも、霊によって祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、
絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。
どのような時にも、霊に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、
絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。⑱

また、私が口を開くときに言葉が与えられ、堂々と福音の秘儀を知らせることができるように、私のために祈ってください。
また、わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。⑲

私はこの福音のための使者として鎖につながれていますが、どうか語るべきときに、私が堂々と語ることができるように祈ってください。
わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話せるように、祈ってください。⑳

パリ通信５月号・第113号　（古賀順子記）

筆者自宅から6Kmのジャルダン・デ・プラント（植物園）筆者撮影

フランスのワクチン接種

今日(5月13日）は「キリストの昇天祭」祝日である。復活祭から40日目、復活したキリストは地上の弟子たちに最後の別れを告げて天に昇る。今後地上で目に見える姿で現れることはないが、十日後に聖霊として再来することを告知する。今年は5月13日が「昇天祭」にあたり、フランスでは四日間の連休である。

夏の長期バカンスを前に、「昇天祭」は例年緑が美しい季節で、今年は特別に嬉しい休みになった。今年2月から始まった集団ワクチン接種の効果がようやく見え始めてきた。今日の新規感染者数(21500)、集中治療ベッドを必要とする重症患者数は4583名。数字は依然として多いが、ようやく減少傾向にある。
現時点で1800万人(フランス成人人口の3分の1)が1回目のワクチン接種を終えている。今週からは年齢、職業、既往症の有無を問わず18歳以上のワクチン接種希望者には当日予約が可能となった。6月15日からは何の条件もなく、成人希望者は誰でも接種可能になる。
私自身、第1回目ファイザー製ワクチンを4月末に打って、6月4日2回目の接種を待っている。血栓などの副反応報道に不安もあったが、二日ほど腕が痛く、三日ほど倦怠感が続いただけで案ずるより産むが易しだった。何よりも外出のストレスから開放されるのは予想外に安心感がある。
フランスはロックダウンが長く続き、夜間外出禁止も未だ続行している。人に会う機会も極端に減少し、マスクに手洗いを欠かせない。知らず知らずのうちに人に会う恐怖心が溜まっていたが、ワクチン接種のお陰で人に移さない、移されない、罹ったとしても重症化しないことで気持ちが軽くなった。

5月3日自宅から10km以内の移動制限が解除されて初の連休となった「昇天祭」。海外は難しいとしても国内を自由に移動できる喜び、開放感を皆が味わっている。久しぶりで家族に会いに行く人、海や山で新鮮な空気を満喫する人、連休初日は2年前の夏以来の高速

道路渋滞となった。カフェ、レストランは未だ閉まっているがサンドイッチやテイクアウトのお弁当で外に出る幸せを大いに満たしている。

ワクチン接種と段階的な規制緩和で6月30日にはコロナ禍の出口に到達できる見込みだという。もちろんこれでコロナ禍が終わる訳ではないが、ようやく前向きに生活できる期待感が明るい気持ちにしてくれる。
フランスはコロナワクチンの数も足りているようで、種類も多い。ファイザー製、モデルナ製、アストラゼネカ製、ジョンソン&ジョンソン製と4種類から選ぶことができる。それぞれに接種回数と接種の間隔は異なるが、大きな違いはアストラゼネカとジョンソン&ジョンソンは不活化ウイルスから作る従来のワクチンであるのに対して、ファイザーとモデルナは「ARN messager」(伝令リボ核酸)による新しいワクチンであることだ。
従来一つのワクチンを開発するには最低10年が必要と言われ、開発費も巨額で、今回のコロナワクチンが1年で開発されたことは驚異と言わざるを得ない。人類を救うという急務が10年を1年で可能にした訳だが、そこにはやはりフランス「パストウール研究所」の存在があった。

パリのパストウール研究所では1950年代からDNA研究が進み、1961年3人の研究者チームが遺伝子コード「伝令リボ核酸」(メッセンジャーリボ核酸)の存在を発見していた。
フランソワ・グロ、フランソワ・ジャコブ、**ジャック・モノー**の3人である。モノー(Jacques Monod, 1910-1976)はジャコブとともに1965年ノーベル生理学・医学賞を受賞し、1971年から1976年パストウール研究所所長を務めた人である。1970年『偶然と必然』(Le hasard et la nécessité)を出版し、哲学的な世界観を発表した。実際に「伝令リボ核酸」ワクチンを開発した。
実用化に成功したのは彼らの次世代、ハンガリーからアメリカに亡命した女性研究者カタリン・カリコ(65歳)らであるが、こうした研究者たちおかげで普通の生活が戻ることに感謝したい。
曇り空のパリに残った住人たちも、近くの公園や川岸をゆっくり散歩し、先が見えてきた開放感を楽しんでいるようだ。

（上記カタリン・カリコの写真と下記註は小原靖夫が編集したもの。下記はウキペディアからの引用編集）

ジャック・リュシアン・モノー（1910〜1976）は、フランスの生物学者。フランソワ・ジャコブとともにオペロン説を提出し、これによって1965年度ノーベル生理学医学賞を受賞した。
動物学を学んで1931年にパリ大学を卒業し、その後原生動物やショウジョウバエ遺伝学の研究を行った。さらにアンドレ・ルヴォフ（のちにノーベル賞共同受賞）の指導を受けて大腸菌の代謝調節に関する研究を行った。第二次世界大戦中にはレジスタンス運動に参加した。1959年パリ大学に招聘され、1971年にはパスツール研究所所長に任命された。
戦後も大腸菌の研究を継続し、これによって1950年代から60年代にかけ、mRNAを介した遺伝情報の発現や、フィードバックによる遺伝子の調節を説明するオペロン説など、すべての生物に共通する分子遺伝学の基礎的概念を確立した。